+博論書式3(論博書式3)

平成 29 年　1 月　19 日

博士論文の審査結果の要旨

専攻	保健医療学専攻	分　　野	福祉支援工学分野・福祉支援工学領域
学籍番号	14S3021	院生氏名	黒澤千尋
通学キャンパス	東京青山キャンパス		
論　文　題　目	健常高齢者における Timed Up and Go test の運動学的分析		
審査結果（枠で囲む）	合格　　不合格		

1.研究の概要

1）研究の意義・目的、方法、結果、結論

本研究は高齢者の移動能力を客観的に評価する指標であり，日本でも保健活動の評価指標として活用されているTimed Up and Go test（以下，TUG）について運動学的分析を実施し，高齢者の移動能力をより詳細に評価する指標とすることを目的としている研究である。対象は，健常高齢者28 名と健常若年者22 名である．TUGを起立，往路，方向転換，復路，着座の5区間に分類し，三次元動作解析装置を用いて各区間における動作の指標（ステップ数，ステップ時間，総軌跡長，歩幅，歩行速度，速度変化率），姿勢の指標（身体傾斜角度）について高齢者と若年者で比較検討している． 結果として高齢者では方向転換，着座区間の時間配分が有意に大きく，特に高齢者は方向転換中のステップに時間を要し，直立に近い姿勢で大回りの方向転換をすることが明らかとなった．本研究の結果から，往路区間と方向転換区間の歩行速度および歩幅の調整に支障をきたし，方向転換時に大回りする高齢者は，TUG所要時間が長くなる傾向があることが分かった．所要時間のみを評価するTUGに，対象者の往路区間の歩行や方向転換動作の観察を組み合わせることによって，臨床的に有用な指標となる可能性が示唆された．

2）研究方法，論証，論文形式の適切さ

本研究は，国際医療福祉大学倫理審査委員会（14-Ig-111），神奈川県立保健福祉大学倫理審査委員会（保大7-36）の承認を得て実施しており，倫理的問題はない．また方法論，論証の過程，論文形式についても博士論文として十分であった．

3）知見の新規性と価値

介護予防事業など保健活動の評価指標の1つとして広く活用されているTUGについて，構成区間に分けて詳細に検討した報告は他にない．またその中で，高齢者が方向転換時に特徴的な戦略を選択していることを明らかにしたことは本研究の新規性であり，今後の同評価指標の臨床での活用上重要な指摘であり高く評価できる．

2. 口頭試問の結果および審査経過

審査会は1回（平成28年12月2日）に開催され，審査担当者より詳細な測定方法，データの有効数字などについて質問があり，適切に応答した上，論文の修正を求めたところ適切に修正された．

3. 合否

以上の結果から，審査会の審査員全員は本論文が著者に博士（保健医療学）の学位を授与するに十分な価値があるものと認めた．

論文審査担当者	主　査　　下井　俊典
	副　査　　黒川　幸雄
	副　査　　為数　哲司